足立区教育委員会指導力向上中核校

渕江小学校　外国語活動・ 外国語研究通信

第５号
令和４年 10 月

今年度第5回目となる外国語活動・外国語の研究授業を 市川 留花 教諭が行いました。新型コロナウィルス感染症対策のため体育館で行いました。協議会では、聞く側の反応を引き出す場面設定や中間指導について活発な意見交流を行いました。指導・講評では、文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成
～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：4年2組 担任 市川 留花 教諭
単元名：Unit 7　What do you want?
指導講評：文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生より

〈研究経過報告〉

「思いを伝えたい」と児童が思うにはどうしたらよいか、を重点に考えた。

①目的・場面・状況等を明確にした言語活動の工夫

単元の始めにエンドプロダクトを提示し、どんな力を付けたいか児童が見通しをもてるようにした。児童にわかりやすいように動画を作成した。エンドプロダクトは自分の考えたスープを栄養士に英語でプレゼンすると設定した。給食で本当に出るかもしれないということで意欲を高め、必然性のある活動になると考えた。

②表現を繰り返し使うための工夫

スモールステップで取り組めるようにした。やりとりを何度も聞いたり、話したりできるようにした。児童が自信をもって話すことができるようになるには「聞く側」の反応も大切だと感じた。そこで、聞く側の聞き方を考えさせ、確認する時間も設けた。

③評価の工夫

振り返りカードに相手に配慮する項目を入れた。それをめあてのときに確認し、目標をもちながら取り組むことができると考えた。

〈授業者自評〉

・I want ～.が使えるようにすることにこだわって計画し、指導した。
・中間指導の際に、ほうれん草が言えなかった児童にＩwant ～.という文で言い切らせることができなかった。わからなかった本人に文章で言わせるとよかった。
・友達と伝え合う活動中の聞いている側の反応を拾いきることができなかった。本当は、聞いている側の反応を拾って、2回目の中間指導で児童のよいモデルを示したかったのにできなかった。

〈研究協議会〉

【よかった点】

・エンドプロダクトがよかった。自分の考えたスープが給食に出るかもしれないとわかったときの児童の反応がよかった。
・エンドプロダクトを提示する際に動画を使ったことは児童にとってとても魅力的だった。
・担任が考えたオリジナルスープの紹介の時に野菜のおもちゃを使用したのは、児童の興味・関心を高めるのに役立っていた。

・動画や教材などの準備がすばらしかった。
【質問】
・児童がどのようなスープを想像しながらやりとりをしているのか気になった。
➡みそ汁やスープの写真を提示し、何が入っているか確認していく活動も考えたが、やりとりの時間を十分にとることを重視し、カットした。しかし、この活動をしなかったがために、想像しにくい児童もいたかもしれない。

・本時は野菜だけを入れる設定だったのに、担任の見本には豚肉が入っていた。
➡バランスの良いスープを考える。野菜だけのスープを作った状態で、今後の授業で肉などを入れることにしていく見通しである。

【改善できるポイント】
・I want ～.ではなく、何も疑う様子もなくI like ～.と言っている児童がいた。
➡たくさん表現していたのに、もっとI want ～.を意識できる工夫が必要だった。
　I like ～.を使っている児童がいるという事実を担任が気付けるかが大事である。
　物のやりとりがないからI want ～.と言う必要性がないこともI want ～.が定着しきれなかった原因かもしれない。

・カードや物がない中で、What do you want? I want ～.のやりとりは不自然ではないか。I like ～.の方が自然である。
➡Here you are.と言いながら物を渡すジェスチャーをすれば反応がよかったかもしれない。
➡バランスのよいスープを考えるので、自分の好きな物だけではないかもしれない。I like ～.ではなくてもいいのでは。
➡1組で事前授業をしたときには、教科書の後ろについているカードを使ってみた。やりとりは楽しそうだったが、カードの中の物を選んでしまいがちで、野菜のバリエーションが少なくなってしまっていた。

・「聞く側」の反応を重視していたが、児童がどのように反応してよいのかわからなかったのではないか。
➡今まで「聞く側」の反応を重視する指導に取り組んでいなかったので、どのように反応したらよいのかわからなかったのかもしれない。これから取り組んでいきたい。

・振り返りを発表させた児童の何がよかったのかを全体で共有できたらよかった。他の児童がどのように振り返りをすればよいかのモデルになり得た。

〈指導・講評：文部科学省初等中等教育局視学官　直山　木綿子　先生〉
・学校全体の雰囲気が変わってきている。学校が充実している。
・同じ学年の野田先生のサポートがとてもよかった。2 人で練ってきたことがよくわかる。児童たちにもよい影響がある。
・自評でしっかり振り返ることができていること、全てにおいて意図的に指導していたことが、すばらしかった。
➡常に意図的に指導することが大切である。
・事前準備がよかった。児童は、野菜の具体物も嬉しかったが、先生がここまでやってくれる、ということが嬉しかったはずである。児童の心をぎゅっとつかんでいた。
・授業の流れ、言語活動が中心の流れでとてもよかった。
・初めに野菜の名前を教えるのではなく、やりとりをしながら教えていったことがよかった。言語活動の中で新しい語句を使えるように指導していた。

聞く側の反応を引き出すには
・担任と AD の最初のやりとりでも、先生たちの反応が薄かった。もっとたくさんの反応の例を示したかった。
　What do you want?　I want potatos.
　Wow! Good!　I like potatos!　など。
　今日学習する言語表現だけではなく、たくさんの様々な表現を散りばめることも大切である。

・反応させるためにどのような工夫をしたらよいか？
<話し合い→出てきた案>
　・物（カード）のやりとり
　・相手に言った野菜の絵を描いてもらう。
　・スープの名前を提示する。一人一人が事前にスープをイメージしておく。
　・お店とお客さんという設定にする。
<直山先生>一案として、「ランキング調べ」・・・みんなはどんな野菜を入れているのだろう。どの野菜が人気なのだろう。
　　「自分と同じ野菜はあったかな」
　目的や場面、状況の設定をする！

「心が動くときは、目的が達成されたとき」
聞く側には聞く側の、話す側には話す側の目的をもたせることが大切である。